第2回 令和7年度地域づくり人材の養成に関する調査研究会 議事概要

◯日時
2026 年 2 月 25 日（水）13:30～15:00
◯場所
中央合同庁舎第2号館 9階 902 会議室
◯出席者
出席構成員：大杉座長、加留部構成員、小田構成員（WEB）、河井構成員（WEB）、吉弘構成員（WEB）
地域力創造グループ 人材力活性化・連携交流室：近藤室長、横張専門官、高橋事務官
MURC：細木、島崎、善積（WEB）、庄内（WEB）

1. 開会

2. 議題
（1）令和7年度調査報告書（案）について
（2）研究会からの提言（報告書（案）第5章）について

MURC
・ （資料説明）

大杉座長
・ 報告書（案）について、意見をいただきたい。
・ まずは加留部構成員より追加のコラム・修正点について補足いただく。

加留部構成員
・ 赤字は「てにをは」や事実関係の修正である。
・ コラム（報告書（案）p.6）は 20 代で所属していたボランティア団体の停滞を機に 10 年以上継続している九州のボランティア団体（30 程度）へヒアリングを行った結果を記載している。
・ ①最初の想いを語り継いでいく大切さ（立上げメンバーから第二世代に引き継ぐ際は「記憶」だけでなく「記録」も残す）、②時間軸のタイミングで趨勢が起こる、③下がる要因 3 つと盛り返す要因 3 つ、④活動の「じんざい」には4種類（人財・人材・人在・人罪）ある。
・ 団体の中長期の趨勢の傾向は個別の事業やプログラム、地域動向と相似形の要素があると推察している。

大杉座長

- 報告書（案）p.9 の図表5について、年数を追記していただきたい。
- 報告書（案）p.34 の 4.（2）について、ファシリテーションの 3 つのデザインのうち、プログラムデザインについても説明を追記していただきたい。

加留部構成員

- プログラムデザインは個別の進め方を作ることである。

MURC

- 承知した。

河井構成員

- 報告書（案）の構成は事例の提示、事例から学べることの提示、学べることから提言を行う、という順である。提言を読むことで事例をどう読めばよいか分かり、改めて事例を読むことで初めて提言が腑に落ちる。こうした理解でよいか。その点を明確にした方がよいかもしれない。あるいは、最初に提言があった方がよいのではないか。今回の事例はとても魅力的であるため、事例を読んで終わってしまう気がして不安である。
- また、提言（案）は当然なことが書かれている。決定的に欠けていることがあるから人材育成が上手くいかない、という理解であればすべてを実施する必要があると伝えた方がよいかもしれない。報告書（案）には「エコシステム」が重要な発想として導入されているにもかかわらず、提言（案）には記載がない。また、提言（案）は羅列に見える。人材育成が上手くいかないのは、「エコシステム」が十分に機能していないからであるとすると、羅列ではまた同じことになる。

MURC

- 1 点目について、指摘の通りである。ベーシックな調査報告書の構成であるが、今回は事例が2つあり、どちらも特徴的である。提言の後に概要をつけるか等の構成は検討する。
- 2 点目についてはこの場での回答は難しい。

大杉座長

- 2 点目に関しては本日の研究会で話をしなければいけない。
- 1 点目について、報告書（案）p.1 に「エコシステム」に関して追記いただいたが、全体を読み解くような提言の記載はない。最後まで読み通すと分かる。そこが伝わる作りの方がよいだろう。2 つの事例から導き出すことを明確にすることはできるのではないか。
- 内容として最終的な提言をどのようにまとめるかも合わせて意見をいただきたい。

小田構成員

- 感想になるが、誰に何をどう伝えるのか。我々はこういう風にしていった方がよい、こうするべきというコミュニケーションについて、議論してきた。そこを言及できていなかった。
- ナラティブな情報は得られた。福岡都市圏域のヒアリングに参加して、そこで起こったこと、何があったのか、なぜそうなったのかは理解できた。この報告書（案）ではそこがそぎ落とされてしまっている。
- 報告書をどのように使うのか、何を伝えたいのかということに関して、手段に軸が置かれている。地域の歴史を知ることが重要という話があったように、何があったかという物語的な部分も大事な要素ではないか。

大杉座長

- 報告書を物語にするわけにはいかない事情もある。おっしゃることは理解できる。
- 福岡で見たような演劇の方が伝わりやすい。

小田構成員

- 報告書を読み慣れた一部の人にしか情報が伝わらない。
- コミュニケーションの研究であるため、研究会の中で報告のあり方を検討してよいのではないか。

吉弘構成員

- 福岡都市圏域のヒアリングは文字にすることが難しい。

大杉座長

- いずれの事例にも中核人材がいるが、中核的な体制（東北公益文科大学、福岡市役所）もある。体制から始まりつつ、その中だけでなく空間的な広がりを作ってきたことが重要である。
- しっかりとした組織の中で体制がある、だけではなく広がりを持ったのはなぜかを掘り下げて考えていけないか。停滞から盛り返すには中核的体制だけでない広がりができることも関係しているのではないか。
- 中核的な体制から空間的な広がりへと関係づけて示せるとよい。
- 事実をナラティブに語ることに加え、事例は2つだけであるため、うまくいっているところとそうでないところの差を考えてもらえるようなまとめ方ができるとよい。
- 中核人材を強く言いすぎて、中核人材を作ったという言い方になっている。その通りではあるが、広がりの部分の示し方を考えていただきたい。
- アンケート調査の際はスノーサンプリング的に影響を与えた人を出してもらったが、本当は様々な人が芋づる式に人を挙げていく調査ができるとよい。ヒアリングが一部にしかできなかったため調査としては不発だったが、ある程度はつかむことができた。

- 人のつながりで広がりができて、対話的な空間がそれぞれの地域で築かれてきたことをうまく示してもらいたい。
- 「エコシステム」や「生態系」についての記載を充実してもらいたい。「エコシステム」（循環・動的）と「土壌」（長期的）の使い分けも必要である。
- 報告書（案）p.5 図表 4 と似た図を人口政策の際に使用した。人口の場合、V 字回復はほとんどせず、よくて定常化、大半は下がっていく。人口は減っていくが、地域がつながりをつくって対話的な空間を広げていくと盛り返せると示すことは読む人にとっては勇気づけられる話である。うまく提言と結びつけられないか。具体的にどう書くのかは難しいが、そのような視点でまとめるとまた違う報告書の仕上がりになるのではないか。

加留部構成員

- 人口は定住人口が減っている中で盛り返すことは難しい。エリア・地域・団体の人数が減っていたとしても活動量を担保するには他地域の力を借りることができる。それが活動人口・協働人口に当たると考えている。この研究会でも外部人材の活かし方について話した。そこと結びつけると良いかもしれない。
- 提言は冒頭に持っていった方がよいのではないか。
- なぜうまくいかないのかを考えたとき、手早く成果を求めて時間をかけないこと、振り返りをせず次につなげられてないことが要因にある。
- 人材育成の優先度を上げることが重要である。実施することが目的になっていないか。目的をもって取り組む必要がある。
- 地域の特性などの背景で、起点をどこに持つのか。こちらの都合ではなく相手の都合があっての話である。中核的体制の起点は大学や市役所であるが、それがフィールドへ広がっていくことにより、中心軸が移行していく。始まったところ（大学や市役所、NPO）が閉じずに開く、開いて繋がる場を作ったことが大きな要素である。
- 一人でやらなければいけないと思っている人やスピード重視である人に伝えたい。

MURC

- 「エコシステム」について、「土壌」との書き分けが必要である。「エコシステム」は人のつながり、「土壌」は地域の話である。混乱して書いている部分があるため整理する。
- 人と人のつながりについては盛り込めていない。中核人材のつながりや誰から影響を受けたかはアンケートしているため、集計・図化して示したい。
- 中核人材ではなく、関わっている受講生（東北公益文科大学）の一人にヒアリングした。今週末にもう一人ヒアリングする。どういう人から影響を受けたか、つながりを聞く機会はある。すでに聞いている内容は報告書に落とし込めていなかった。

河井構成員

・　提言には中核という言葉がなく、「地域づくり人材」と書かれている。今年度は中核人材を作り出すにはどうしたらよいかという内容だと思っていた。そうではなく、日常的に普通に暮らしているが呼びかけがあれば呼応できる人が生まれてくるとよい、という話をしたいのか。あるいは地域づくり人材の養成そのものというよりも人材の養成によってよりよい地域が作られていくという方向で書きたいのか。報告書の中で明確になっていない印象がある。
・　福岡都市圏域の人々は明らかに中核人材である。あのような人が次々と生まれてくることは考えづらい。中核人材が次々と生まれてくるためにはどうすればよいか、という報告書を書くのか。生まれるときは生まれるとして、中核人材を基礎に多様な少しやる気のある人たちを増やすためにどうすればよいか、を書きたいのか。人材の養成はあくまで要素であって、最終的には地域づくりの方が重要だから人材の養成をやっていくうちに地域が作られるということを書きたいのか。

大杉座長
・　どう捉えているかは人によってずれが出ているかもしれない。
・　報告書（案）p.5 図表 4 は地域づくりがどういう状況か、個別の団体や活動状況を見ている。個別の団体を見ているとき、中核人材は非常に分かりやすいが広がりを見ていこうとすると中核人材も広がりの中の一部になる。
・　最初の段階で設定できていなかったところではある。区別できるかを含め、考えていかなければならない。

河井構成員
・　区別の必要はなく、どこに光を当てるのか。中核人材はなぜ生まれるのか、が提言になるのか。あるいは中核人材が生まれてくることを含め、より幅広い人材が成長していくことを書くのか。地域に焦点を当てて、このような地域になるとよいということを書くのか。
・　同じ内容でもどこに焦点を当てて提言するのかが明確でなければ、読んだ人は事例が示されるだけで自分事にできないのではないか。そのためには何のための報告書なのかを明確にする。あるいはあくまで事例を提供するだけで、どう解釈するかは各々に任せることも考えられる。

大杉座長
・　中核人材を前面に出すよりは、地域づくりが前に進んでいくにはつながりがあるということを個別の団体活動からではなく、いろいろな広がりから見ていきたい。個人的にはそこに重点を置いていた。研究会として必ずしもそう見ていこうとはしていない。まとめ方は中核人材に力を入れている。良し悪しではなくどちらにするか。
・　より明確なまとめ方にする必要はあるだろう。

総務省近藤室長

- 本研究会は「地域づくり人材の養成に関する調査研究」であるから、大目的は「地域づくり人材をいかに養成するか」である。したがって、「地域づくり」か「人づくり」か、どちらに焦点があるかと言われれば「人づくり」である。ただし、「人づくり」と「地域づくり」とは密接不可分。「地域づくり」にとって本質的に重要な要素が「人づくり」であると考えているからこそ、そのための専担の研究会を設けている。
- 次に、令和5年度は中核人材、昨年度は外部人材に焦点を当てていた。今年度のテーマは「中長期的に取り組まれてきた地域活性化の取組において、取組初期から現在に至る事業の変遷等について調査・分析する。また、地域のなかで取組が継続し、受け入れられるプロセスを地域の土壌・エコシステムの観点で調査・分析する。」（報告書（案）p.1）と設定して、具体的な 2 つの事例を分析した。そのうえで、「分析まででとどめる」という選択肢もあるが、「そこから得られた知見について地方公共団体へ情報提供を行うとともに、必要に応じて国の人材支援制度へのフィードバック等を実施する。」（報告書（案）p.1）としており、これが今年度の調査研究の目的と考えている。
- したがって、報告書の読み手・対象者は地方公共団体職員、その先にいる地域住民や地域づくり活動をしている方々を想定している。また、提言を踏まえて、総務省の地域づくり関係の施策にフィードバックしたい。

加留部構成員

- 中核人材や地域住民の方々がどういった価値を共有しているのか。ビジョン（まちをよくしたい、よりよく生きたい）を含めた、何を大事なものとして得ていきたいのか。それを実施するためには人を育てる時間が必要である（提言（案）5-1）。もう一つはフィールドとしての空間、環境である。「エコシステム」的な関係性まで含めた環境が必要である（提言（案）5-3）。こうした立て付けではないか。
- 大きな目的は地域をよくしたい、というもので、地域づくり人材が養成されていく。大きな意味では地域づくり人材は一つの手段として捉える。
- 中核人材はもちろんあるが、中核人材と呼べるか分からない方々も含め、一人のスーパーマンがやっているというよりは、能力の差はあれども複数人が束になって取り組んでいる。一緒に学んだり考えたりする人がまだまだいるのではないか。いつものメンバーに頼りすぎてしまって、高齢化や人口減少で人がいなくなってしまうところでも、潜在的な人材がいるのではないか、と希望を持たせたい。
- 足りないのであれば、外部の人材も含めて考える。令和 5・6 年度の調査研究を要素として噛ませるのもありだと考える。
- 今まで焦点を当てていなかった時間軸を対象としたことが大きい。さらになぜこのようなことができたのか、という大事な価値（地域・人によって異なる）をどのように考えていくのか。

大杉座長

- 最後に言われた部分は具体的にどう書くかが難しい。
- 地域をよくしていくという部分について、若い人たちは自分がやりたいことをやっていくことが前に出ているが、それが地域のためになることであるため、広がりが出ている。

加留部構成員

- その考え方がウェルビーイングである。個人としてもよりよく生きたい、という発想が地域の繋がりや環境整備に繋がっていく。組織に対して自分ができることをするという考え方から個人の力量や取組によって組織がどう活かされていくのかという考え方になっている。良し悪しでなくどちらの考え方も出てくる。

大杉座長

- 東北公益文科大学はそのイメージに近い。福岡都市圏域は市職員が中心で、そうではなかった。このような内容は文章では表現しにくいが、来年度以降調査研究ができるのであればそこをうまく引き出せればよい。
- やりたいことがあるからこそ対話の場が生まれる。対話の場が必要だから必要だ、ということではなく、こういうことがやりたいから対話の場が必要だという考え方である。
- 記憶だけでなく記録を残すことが大切である。当事者が残そうとしても難しい（活動で忙しい、記録が散乱している）。その体制をサポートできる施策を自治体や国ができないか。
- 福岡都市圏域は著作が出ており、様々なことが分かるが、普通はそんなことはなく、HP や SNS に投稿する程度である。そうした記録の事例として「奥出雲ひと図鑑」がある。記録の大切さは強調してもよいのではないか。

総務省近藤室長

- 記録を残すことは重要で、まさに東北公益文科大学も活動 10 年の節目で『地域共創のすすめ』を刊行し、当事者のオーラルヒストリーなど詳細・網羅的に振り返っている。

加留部構成員

- 第三者が見た際にこの団体がどういった経緯で、また、なぜそのようなことをしたのかを語り継いでいくことができるようにするために記録に残すことに意味がある。

河井構成員

- 提言について、大杉座長が言うように、記録の重要性、地域の発見や記録は提言（案）5-3 にも関わる。
- 提言（案）5-1・5-2・5-3 はそれぞれ大事なことであるが、今までもすでに言われてきたことである。これらを組み合わせることが「エコシステム」である。そこに焦点を当てて書けば学びに

なるのではないか。

- 中長期的になっていないことやファシリテーションという言葉が会議を回すことにとどまっているという問題意識は重要である。5-1・5-2・5-3 をどう組み合わせるのか。
- まずは個別のファシリテーションスキルを用意した上で、その人たちが関わって中長期的な対話の場づくりを行うためには長いスパンで考える必要がある。会議の雰囲気を見つけるだけでなく、その地域特性・地域文化を把握しなければ中長期的な対話の場のためのファシリテーションはできない。
- 5-1・5-2・5-3 はそれぞれ重要であるが、個別のものではなく、「エコシステム」（循環型）としてどう書くか、あるいは図にするか。そこが示すことができれば提言を読んで納得できるだろう。この2つの事例は提言内容を実施できている、と理解でき、実際に取り組めるのではないか。

大杉座長

- 5-1・5-2・5-3 は前提である。どちらの事例も満たしている。「エコシステム」としてどう組み立てられているかを提言に書き込む。一番のポイントは開いて繋ぐ部分である。その部分を2つの事例からどう導きだして提言に入れるか。そもそも開いていない・繋いでいない部分もある。そこを明確にしていく。

加留部構成員

- 今の話を受けると、5-1・5-2・5-3 の絵があって、どこが自身の地域ではできているか（あるいはできていないか）、どのように組み合わせればできるようになるか、というテンプレートを作るイメージか。

河井構成員

- 加留部構成員が言ったことはとても重要である。
- どこが抜けているかを自分で発見できるとよい。このままでは当たり前の話でしかない。そうではなく、自分を振り返ってなぜうまくいかないのか、例えば「対話の場はあるけど中長期的な形でマネジメントできていない」や「対話も大事にしているし、対話を回すファシリテーションスキルを有する人材もいるが、地域に根付いていない」ということに気づくことができる形になるとよい。
- 図として、下に地域があって、地域特性・地域文化に常に触れながらファシリテーションを行っていき、それが単発ではなく中長期になっていく。開く・繋ぐがどういう意味を持つのかを明確にしなければよくあるキャッチフレーズの羅列になってしまう。
- 地域事情がいろいろあるから東北や福岡ではうまくいった、で終わらされかねない。
- 自分は何ができていないのかが明確になるような、気付けるような形の提言へ収束させていく。提言からもう一度事例を読むモチベーションを作らせる内容であれば、参照して自分が何

をすればよいか分かる報告書になる。

小田構成員

- 自治体を支援するようになってから気付いたこととして、外部人材や専門家が見ている自治体はよくできた自治体の姿でしかない。何もできていない、何も手がついていない自治体が見えていなかった。そのような自治体や地域をどのように底上げするか。このような報告者ではそのような自治体には届かず、読み解くことも困難である。場合によっては書いてあることはよいが、どうしたらよいか分からない、となるだろう。
- 可能であれば、提言の中でチェックリスト（例えばこうしたらよい）ということも加えられるとそのような自治体のためになるのではないか。
- また、これら提言内容すべてが必要であることは示した方がよい。

大杉座長

- 手つかずの地域はかなりある。
- どちらの事例もエリアの中でしっかり取り組んでいるが、取組がない地域も含めて考えることが必要である。そのような点をどう考えていくのか。
- 今回圏域としても広めにとったのはそこを意識していたからである。
- 調査の結果として、今回反映できる内容は報告書に記載いただきたい。

MURC

- 提言部分は研究会やヒアリングで議論されてきたことを抽出したつもりではあったが、提言内容それぞれというよりは、どう組み合わせていくかであると理解した。図のイメージはできていないが、提言をいかに組み合わして回していくかをイメージできるようなポンチ絵を検討する。

大杉座長

- 完璧なものは求めない。ある程度今後に活かしていけるようなものとして、この段階でこのような発想をしていたということを残していきたい。

総務省近藤室長

- 御指摘を踏まえ、提言（案）5-2 について、報告書を読んだ自治体・地域の方々が具体的になにをすればよいか分かるよう、自己チェックリスト的な形にするなど工夫したい。
- 「各種研修への盛り込みの提言」（5-2 の 4 点目）としているのは、今回の 2 つの事例を分析した結果、特にファシリテーションスキルを有する人材の育成が極めて重要であることが分かった（5-1 の対話の場づくりにも関わる部分）が、自治体職員がファシリテーションスキルをじっくり学べる機会は意外と少ない印象を持っている。霞が関でも、ファシリテーションスキル

を学ぶことは、利害関係者との調整など業務の上で役に立つのではないか。また、国が実施している「地域おこし協力隊」や「集落支援員」向けの研修の中にもファシリテーションスキルを学ぶ機会を設けられないか、各施策担当者とも意見交換している。

・ 地域力創造アドバイザー制度においても、中長期の継続的な「対話の場」づくり（5-1）、ファシリテーションスキル（5-2）、地域特性・地域文化に対するリスペクト（5-3）いずれも重要であると身に染みて感じており、提言を踏まえた人選や運用を心掛けてまいりたい。

大杉座長

・ 「エコシステム」を動かしていく上で、5-1・5-2・5-3 は潤滑油として重要な要素である。このような潤滑油が切れていることに気づいてもらうことが大切である。仕組みを作っても上手くいかない場合、そういう所をチェックするべきということが読み取れる提言としてまとめられるとよい。

総務省横張氏

事務局で報告書（案）を作成する。

大杉座長

・ 座長一任の形式もあるが、様々意見が出たため、他の構成員にも最終まとめの前に確認してもらう。そこから大きく変えることは難しいかもしれないが。

加留部構成員

・ 図が描けるかは分からないが、河井構成員の話のポイントの整理は行う。

3. 閉会

以上